

〈研究ノート〉進学しなかった同世代の友人からの学び：高校時代のキャリア教育との関連性

KUNII, Akinori / 国井, 昭範 / 田澤, 実 / TAZAWA, Minoru

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

129

(終了ページ / End Page)

147

(発行年 / Year)

2025-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00031226>

進学しなかった同世代の友人からの学び

— 高校時代のキャリア教育との関連性 —

明海大学総合教育センター 講師 国井 昭範
法政大学キャリアデザイン学部 教授 田澤 実

1. 問題と目的

本研究の目的は、大学1・2年生が「進学しなかった同世代の友人」から「生きていくこと」「働くこと」に関して何を学んだのかを明らかにすることである。

労働政策研究・研修機構（2010）は、学校でのキャリア教育が十分でない場合、学生の職業意識が形成されにくく、進路のミスマッチに繋がる可能性があること、そして、キャリア教育を主体的に学ぶことが学生の将来に対する自律的な視点を持つための重要な要因であることを指摘している。しかし、学生の成長はキャリア教育のみに依存するものではなく、多様な経験が進路選択に寄与することも見逃せない。国立青少年教育振興機構（2023）によると、高校生の26.3%が友人から進路選択に関して影響を受けているという。

本研究では、大学1・2年生を対象に、進学しなかった同世代の友人から得た経験について自由記述形式で回答を収集し、そこから得られる学びを分析する。その結果をもとに、高校時代のキャリア教育との関連性を探索的に検討する。

2. 方法

(1) 調査時期と対象校

調査は2024年9月に実施された。対象校は文系6学部を有する私立A大学であった。

(2) 対象者

キャリアプランニングⅠ（1 年次の必修科目）、キャリアプランニングⅢ（2 年次の必修科目）のキャリア教育科目であった。アンケートに回答した人数は 327 名で、各学年の内訳は以下の通りである。1 年生の履修者（633 名）においてアンケートに回答した学生は 179 名、2 年生の履修者（609 名）においてアンケートに回答した学生は 148 名であった。なお、大学 3 年生以上は、就職活動や社会との接点が増え、多様な学びの機会が広がるため、本研究の対象から除外した。

(3) 手続き

各授業の第 1 回目で質問紙調査を実施した。実施目的、成績への影響がないこと、データを研究のみに使用することを伝えて同意した学生を対象に学習支援システム（LMS）を通して行われた。

(4) 用いた質問項目

第一に、中学時代・高校時代の働いている友人から学んだことを自由記述にて質問した。中学もしくは高校卒業後に働いている友人から「生きていくこと」「働くこと」について何を学んだのか尋ねた（設問：中学もしくは高校卒業後に働いている友人から、「生きていくこと」や「働くこと」について何を学びましたか）。第二に、労働政策研究・研修機構（2010）の質問項目である「高校時代のキャリア教育で経験した授業や行事」（13 項目、2 件法）を用いて質問を行った。

(5) 語のクリーニング

まず漢字・ひらがな・カタカナが混在しているものは語のクリーニングをおこなった。たとえば「思う」と「おもう」などの語を出現数の多い語に統一した。さらに「生きていく」は、肯定・否定・必要性を表現しており、特徴語として扱うために、生きていく（肯定）、生きていく（否定）、生きていく（必要）と分類した。そして自由記述データの計量テキスト分析は、樋口（2004）が開発した KH Coder（Version 3.02c）を用いた。なお形態素解析処理をされたものは形態素であるが、樋口（2014）は便宜的に「語」と呼んでおり、本研究も同様に「語」と記載する。

(6) 分析方法

アンケートの分析方法として、樋口（2014）が提唱した2つの手法を接合させる分析アプローチを用いた。第一の手法は、多変量解析によってデータ全体を要約・提示する Correlational アプローチであり、分析者の持つ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示できるという利点がある。

第二の手法は、データ全体の中でどの側面がコーディングルールによって取り上げられたのかを第三者が把握できるようにルールを公開する Dictionary-based アプローチである。分析者の理論や問題意識を自由に操作化し、データの様々な側面に自由に焦点を絞ることができるという利点がある。

3. 結果と考察

形態素解析により「語」を抽出して、データに出現している語の特徴を確認した。その中で、一般的に出現する助詞・助動詞などを除き、名詞・動詞・形容詞の語に着目した。次に自由記述データを非計量多次元尺度構成法で「語」の繋がり、及び全体の外観を確認した（図1）。図中には、グループ分けに対応する丸数字と点線による仕切りを施した。さらに解釈をしやすくするため、上位100語を目安に抽出語を絞り、最小出現数5、布置語97、クラスター10として分析を実施した。

(1) Correlational アプローチによる語の分析

①非計量多次元尺度構成法による語の分析

クラスター1は、2つの次元の中心にあり、すべてのクラスターとの関連が強い語が集合していた。「友人」「働く」「社会」「自分」「お金」などであった。

クラスター2・9・10は次元1のマイナス、次元2のプラスに布置していた。「高校」「辛い」「楽しい」「知る」「生きていく（必要）」などの語が集まっていた。

クラスター3・5・6は次元1のプラス、次元2のプラスに布置していた。「環境」「職場」「稼げる」「労働」「生きていく（否定）」「コミュニケーション」などの語が集まっていた。

クラスター4は次元1のプラス、次元2のマイナスに布置していた。「責任」「高

卒」「中卒」「厳しい」「上司」「生きていく（肯定）」などの語が集まっていた。

クラスター7・8は次元1のマイナス、次元2のマイナスに布置していた。「道」「厳しい」「将来」「勉強」「大事」「不安」「生活」などが集まっていた。

②非計量多次元尺度構成法の語の特徴

次元1のプラス方向に、進学しなかった友人から「働くことを通じて得た価値観や学び」に関する語が多く見られた。たとえば、「環境」「職業」「責任」「上司」「コミュニケーション」などである。そして次元1のマイナス方向は「働くことの現実と葛藤」に関する語が多く見られた。たとえば、「学歴」「卒業」「生きていく（必要）」「生きていく（否定）」「生活」「不安」「将来」など、学歴に対する心情、

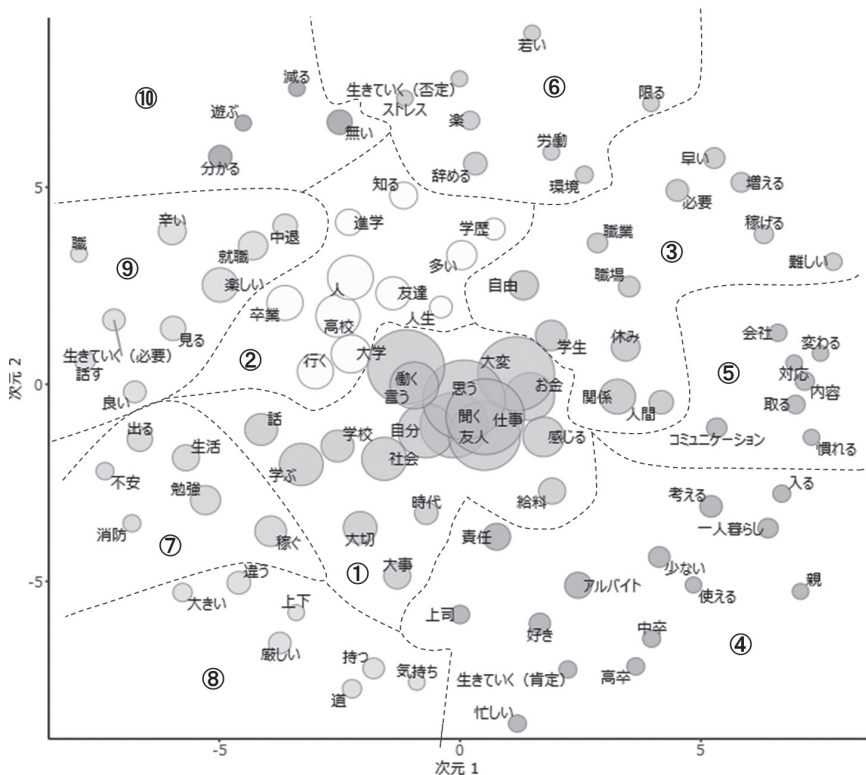


図1 非計量多次元尺度構成法 (Kruskal) の結果

表1 クラスターごとの頻出語の頻度

クラスター1		クラスター3		クラスター5		クラスター8	
思う	156	関係	28	コミュニ	8	違う	11
聞く	141	自由	19	ケーション		厳しい	10
働く	136	休み	17	内容	7	持つ	9
大変	135	人間	12	取る	7	大きい	7
仕事	117	必要	10	会社	6	道	7
友人	104	職場	9	対応	5	気持ち	5
自分	71	早い	9	慣れる	5	上下	5
お金	54	職業	8	変わる	5		
言う	52	増える	8			クラスター9	
社会	44	稼げる	7	クラスター6		楽しい	27
学ぶ	42	難しい	6	辞める	11	就職	18
感じる	37			楽	7	辛い	16
大切	24	クラスター4		環境	6	見る	13
学校	23	責任	16	ストレス	5	中退	12
話	23	アルバイト	15	労働	5	生きていく	10
学生	21	考える	10	生きていく	5	(必要)	
給料	15	好き	9	(否定)		良い	10
大事	15	少ない	9	限る	5	話す	8
時代	11	一人暮らし	8	若い	5	職	5
		上司	7				
クラスター2		高卒	6	クラスター7		クラスター10	
人	46	中卒	6	稼ぐ	21	無い	13
高校	43	生きていく	6	勉強	19	分かる	11
大学	34	(肯定)		生活	15	減る	5
卒業	28	入る	6	出る	13	遊ぶ	5
行く	28	忙しい	6	消防	6		
友達	25	使える	5	不安	6		
多い	19	親	5				
知る	16						
進学	15						
学歴	10						
人生	10						

働くうえでの悩み、その後の自らの生活に関する不安の語が比較的によく集まっていた。

なお、本研究の分類において、「働くことを通じて得た価値観や学び」と「働くことの現実と葛藤」は厳密に区別されるものではなく、これらが混在した。自由記述データでは、働くこととその悩みが同時に言及されるケースが少なくない。たとえば、「大工さんをしている友達から、上下関係がとても厳しくて辛いものだと教わった。正社員ではなくアルバイトを転々としてるため大変そうであった」。このように、語と語の距離が近い場合、非計量多次元尺度構成法による分析では厳密な分類が難しいことがある。本研究では、この手法をデータ全体の傾向を把握するための方法と捉え、その結果を解釈した。

(2) Dictionary-based アプローチによる語の分析

①コーディングにおける分類の設定

まずは頻度表を作成し出現数を確認した(表 1)。次に労働政策研究・研修機構

表 2 コーディング一覧表

分類	コード名	語	頻度	割合
働くことを通じて得た価値観や学び	・ 職業や仕事	職業・仕事・労働・働く・職	271	6.72%
	・ 収入	お金・稼ぐ・給料・稼げる	97	2.40%
	・ 自らの体験との対比	接客・経験・社会・部活・ボランティア・アルバイト・大切	83	2.06%
	・ 仕事環境	上司・上下・関係・コミュニケーション・責任	64	1.59%
働くことの現実と葛藤	・ 学歴	学校・大学・卒業・進学・中退・高卒・中卒・高校	124	3.07%
	・ 働くことの葛藤	好き・楽しい・遊ぶ・自由・時間・楽・休み	121	3.00%
	・ 働くことの辛さ	辛い・不安・厳しい・難しい・ストレス	43	1.07%

注 1) 太字は先行研究である、労働政策研究・研修機構(2010)で用いられた語であり、「第 7 章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析」から抜粋した。

(2010) による特徴語を参考にして、そして非計量多次元尺度構成法の結果も踏まえて、特徴ごとに分類してコーディングルールを作成した(表2)。なおKH Coderでは、回答した文章から抽出するため、1つの中から複数のコードが付与される。

コーディングの分類は2つ、コードは7つを抽出した。以下、分類は【 】、コード名は『 』、語および記述例は「 」を使用し、記述例は傍点を施した。

第一に、【働くことを通じて得た価値観や学び】の分類を『職業や仕事』『収入』『自らの体験との対比』『仕事環境』とした。

第二に、【働くことの現実と葛藤】の分類を『学歴』『働くことの葛藤』『働くことの辛さ』とした。

②コーディングにおける分析結果

【働くことを通じて得た価値観や学び】

選択したコードは、『職業や仕事』『収入』『自らの体験との対比』『仕事環境』であった。これらは“労働者としての働き方”や“働く仕事環境”に意識が向けられていた。

『職業や仕事』が、コーディング分析の中で、一番多くの出現数が見られ、特に進学しなかった友人から現在や過去の仕事を聞いて学んでいた。具体的には以下の通りである。

「学歴がないと肉体労働が多く」

「友人から仕事での出来事を聞いて」

「社会を学んでなりたい職業を見つけること」

『収入』では、純粹に稼ぐ意識、報酬に関する評価であり、具体的には以下の通りであった。

「お金がいっぱい稼げる」

「お金を稼ぐことの大変さを聞いた」

「今の時代の物価高に見合った給料が必要だと思った」

「中卒や高卒は大卒に比べて給料が低いことがわかった」

『自らの体験との対比』では、進学しなかった友人からの話と、自らのアルバイトの経験を対比して認識していた。具体的には以下の通りであった。

「一旦挫折などを経験しても立ち直ることの大切さ」

「アルバイトとは全然違い、自分にかかる責任感がとても大きい」

『仕事環境』では、進学しなかった友人から、人間関係や上司との上下関係、責任の重さなどを学んでいた。具体的には以下の通りであった。

「上下関係や対人関係は大事だと思った」

「上司に対する言葉遣いが最初の頃は大変だったと聞いた」

「仕事での出来事を聞いて、働くことで伴う責任と使命感を学んだ」

「同期や上司の人とのコミュニケーションをしっかりと取らないといけない」

【働くことの現実と葛藤】

選択したコードは、『学歴』『働くことの葛藤』『働くことの辛さ』であった。これらは、“最終学歴に対する悩み”、“活躍する友人への憧れ”、“労働に対する負のイメージ”、“収入に対する意識”などであった。

『学歴』では、高校後の進路選択における悩みなどであり、具体的には以下の通りであった。

「中卒や高卒は大卒に比べて給料が低いことがわかった」

「高校卒業後の進路は大学進学だけじゃないと身を持って感じた」

「高校を卒業後、働いてる友達がいるが、自由が学生時より減ったし、遊ぶ頻度も減っている」

『働くことの葛藤』は以下の通りであった。

「友人から好きな仕事でお金を稼ぐ楽しさを学んだ」

「働く辛さ、学生は自由な時間がたくさんあることを痛感した」

「自由にお金をつぎ込んでいるから働くことは自由なことと学んだ。」

「同い年でも学生と比べると圧倒的に金銭の差を感じたが、それ故に自由度は低く好きに遊べないんだと思った」

『働くことの辛さ』は以下の通りであった。

「朝から夕方まで働いて辛^いと聞^いて」

「お^金を貰^えるぶ^ん厳^しい^いと聞^きま^した^い」

「プ^ライ^バー^トと仕^し事^じの両^り立^たは難^しい^い」

「自^み分^みも将^さ来^ら社^し会^{かい}に出^でて働^{はたら}いた際^{さい}やっ^てい^ける^か不^ふ安^{あん}にな^った^い」

「職^し場^ばの雰^ふ囲^い気^きが合^あわ^ずス^トレ^スを受^うけ辞^やめ^てし^まう^人も多^おいと聞^いた^い」

(3) 友人からの学びと高校時代のキャリア教育との関連

本研究では、高校時代のキャリア教育への取り組み方の違いが、「進学しなかった友人」から得られる学びにどのような影響を与えるかを、共起ネットワークを用いて分析した。

受け身の姿勢でキャリア教育を学んだ学生は、進学しなかった友人からの学びが限られる可能性がある。キャリア教育の取り組み方と「進学しなかった友人」から得られる学びの関係性を明らかにすることを目指す。

①意識調査結果を3群に分類

労働政策研究・研修機構（2010）の調査で使用した、高校時代のキャリア教育の意識調査（13項目、2件法：覚えていない、覚えている）の質問紙を用いた。各項目の平均値を表3に示す。

次に、高校時代のキャリア教育に関する記憶の程度を示す13項目の合計得点を算出した。その後、この合計得点を基に、得点の多い者を「高群」（n=97）、中程度の者を「中群」（n=125）、低い者を「低群」（n=108）として分類した。なお、分類の際には、3群の人数がほぼ均等になるよう調整を行った。

平均値が高い回答は以下の通りであった。

“進路に関する二者面談や三者面談”

“進路の目標や計画を考える授業”

“履歴書の書き方や面接試験の練習”

“進路に関する個別相談やカウンセリング”

平均値が低い回答は以下の通りであった。

- “職場体験学習やインターンシップ”
- “ボランティアなどの体験活動”
- “労働法（働くことに関する法律）に関する授業”

②意識調査結果の平均値の分析

本研究では、高校時代のキャリア教育に関する意識調査結果をもとに、経験した授業や行事を平均値で分類した。平均値が0.8以上を「よく覚えている授業や行事」、0.3以下を「あまり覚えていない授業や行事」と定義し、3つのグループに分けた。それぞれの特徴は以下の通りである。なお、“進路に関する二者面談や三者面談”は全グループで効果が認められた。

表3 高校時代のキャリア教育に関する意識調査結果

No	設問	各項目の 平均点	各平均値の内訳		
			高群	中群	低群
1	職業興味や職業適性などの検査	0.65	0.93	0.70	0.34
2	自分の性格を理解するための検査	0.69	0.96	0.78	0.36
3	職業や仕事を調べる授業	0.72	0.99	0.80	0.39
4	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	0.53	0.89	0.51	0.24
5	職場体験学習やインターンシップ	0.36	0.66	0.32	0.14
6	ボランティアなどの体験活動	0.43	0.66	0.44	0.21
7	進路に関する二者面談や三者面談	0.94	0.99	0.94	0.89
8	進路に関する個別相談やカウンセリング	0.81	0.95	0.86	0.64
9	進路の目標や計画を考える授業	0.87	1.00	0.94	0.67
10	履歴書の書き方や面接試験の練習	0.82	0.99	0.95	0.52
11	就職活動の進め方や試験対策の授業	0.61	0.95	0.69	0.23
12	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	0.62	0.94	0.66	0.30
13	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	0.44	0.83	0.38	0.19

注1) 2件法 (0: 覚えていない。1: 覚えている)
注2) 各設問の最低点は0点、最高点は1点である。
注3) 0.3以下のセルに着色、0.8以上の値に太字を施した。

高群：13項目中11項目が「よく覚えている」であった。このグループでは、キャリア教育全般で学びが多い傾向が見られるが、“職場体験学習やインターンシップ” および “ボランティアなどの体験活動” の平均値は低かった。職業人の話を聞くなどの体験型学習の効果が低いと考えられる。

中群：13項目中5項目が「よく覚えている」であった。具体的には、“職業や仕事を調べる授業”、“進路に関する二者面談や三者面談”、“進路の目標や計画を考える授業”、“履歴書の書き方や面接試験の練習”、および “進路に関する個別相談やカウンセリング” であった。このグループでは、自分の進路や特性を理解する授業の学習効果が高いと考えられる。

低群：13項目中1項目（“進路に関する二者面談や三者面談”）のみが「よく覚えている」に該当した。他の項目については学習効果が低いと考えられる。

③共起ネットワークによる3群比較

本研究では、共起ネットワークを用いた3群比較を行い、以下の2点に着目して分析を実施した。第一に、「中心性の語」である。第二に、本研究で注目した「特徴語」である。

「中心性の語」とは、社会ネットワーク分析での「中心性」を示す語を指し（樋口, 2014）、特に共起ネットワークでは「中心的役割を果たす語」と考えられる。本研究では、共起ネットワーク全体の分析において、中心性の語が参考になると考えた。なお、この中心性の語はKH-Coderを用いて抽出した。

一方、本研究が着目した特徴語は「高校」である。労働政策研究・研修機構（2010）は、最終学歴を肯定的に捉える学生が広義の意味での「キャリア」をポジティブに考える傾向を示している。逆に、最終学歴を否定的に捉える場合は「キャリア」もネガティブに捉えやすい傾向を示している。そのため、「高校」をどのように捉えているかを分析することは、将来に対するキャリアを理解するうえで重要である（「中学」は出現数が少ないため分析対象外とした）。なお、下記の共起ネットワークにおいて、「中心性の語」と「特徴語」は四角の枠を施した。

④3群の結果

高群の結果を図2に、中群の結果を図3に、低群の結果を図4に示す。樋口

(2014)によれば、KH-Coderの共起ネットワークの特徴は次の3つである。第一に、共起ネットワークの語と語の繋がりは「実線が一番強い繋がり」であり、近接している語ではなく、線で結ばれていることに意味がある。第二に、「語」の出現数は円の大きさに比例する。第三に、各ネットワークはサブグラフ検出としてグループ分けされて、お互いに異なるサブグラフに含まれる語は破線で結ばれる。丸数字はSubgraphの分類を示す。なおKH-Coderでは3群に分割する場合、付置語も各群に分割される。しかし非計量多次元尺度構成法(出現数5)と同程度の付置語を出現させて比較するため、共起ネットワークにおいては出現数3として付置語の上位60を用いた。

高群の特徴

ある程度、共起ネットワークが繋がっており、中・低群よりも、各ネットワークのまとまりが見られた。

“中心性の語”は、「関係」「夢」であった。具体的には「関係」から「人」という語に接続しており、人間関係を重視する姿勢が見られること、人から「夢」を聞くこと、自らの「夢」を持つことで、将来の願望を意識していた。そして「生きていく(必要)」「生きていく(否定)」が、全体のネットワークに含まれており、働くことの必要性や働くことへの嫌悪感も含めて、働くことを現実的に捉えていた。

特徴語の「高校」では、「友達」「職業」、その先には「夢」に接続しており、職業社会人への参加の大変さを理解しつつ、友人から職業の学びを得ていた。さらに学歴の重要性を認識していることや「たとえば、働く勇気を学びました」という表現からも、将来の自分に接続させて学びにつなげていた。

総じて高群は、人間関係の重要性を理解しつつ、自らの夢も検討しながら、未来志向の意識があるといえる。生きていくことへの必要性も感じているが、否定的な感情もあり、進学しなかった友人から「現実の社会」を学んでいた。

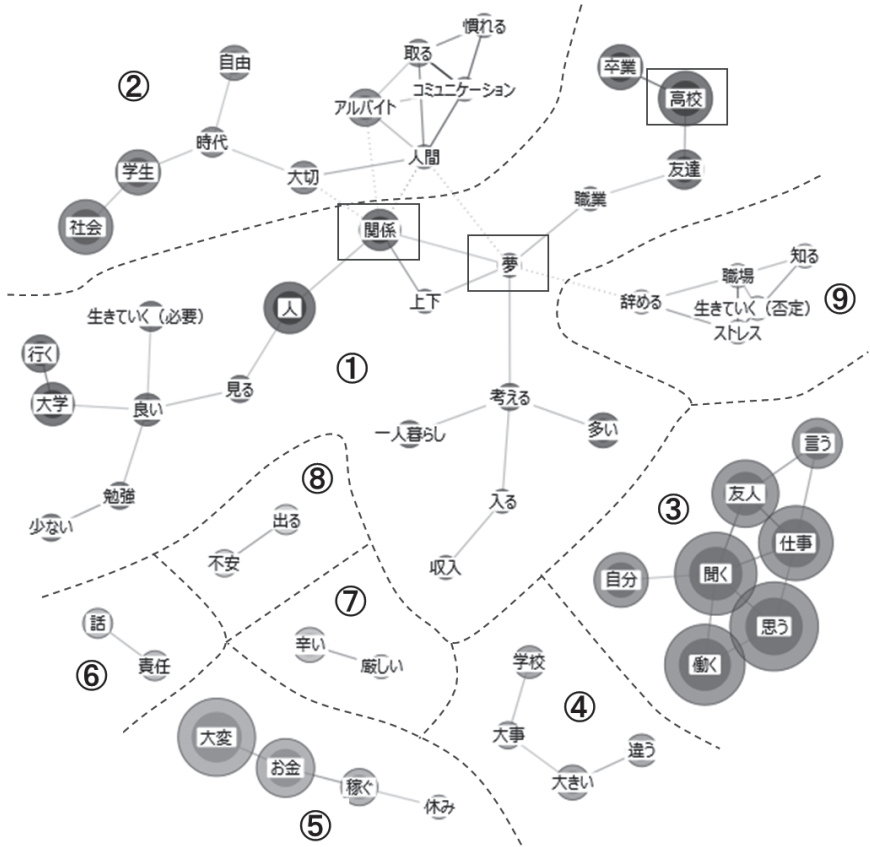


図2. [高群] 進学しなかった友人から学んだこと

中群の特徴

高群と比較して、各共起ネットワークの繋がりが少なく、切断状態が見られた。

“中心性の語”は、「辞める」「高校」「友達」「難しい」「休み」であった。「辞める」は、「労働」「人生」「高校」の語と関係しており、働くことに対して負の感情が多く見られた。「友達」は、土木業に従事している友人からの印象で、給料が多い・肉体労働が多い点から、学歴の重要性を考えずに、仕事を単に“楽である・楽でない”という感情で捉えていた。「難しい」「休み」の語では、人間関係の難

し、有給休暇の取得が難しいこと、仕事と私生活の両立に困難さを感じていた。

そして特徴語である「高校」は、「辞める」「話」「卒業」と接続しており、肯定的に友人の話を聞いている点（たとえば、「大変だし人間関係や信頼の部分が大切さだと思った」）は多く見られた。しかし、将来のキャリアを考えていく捉え方は少なかった。

総じて中群は、友人からの意見に耳を傾けているが、友人からの聞いたことに対して漠然と考えており、単に出来事に対しての感情的な印象が多いことが読み取れた。

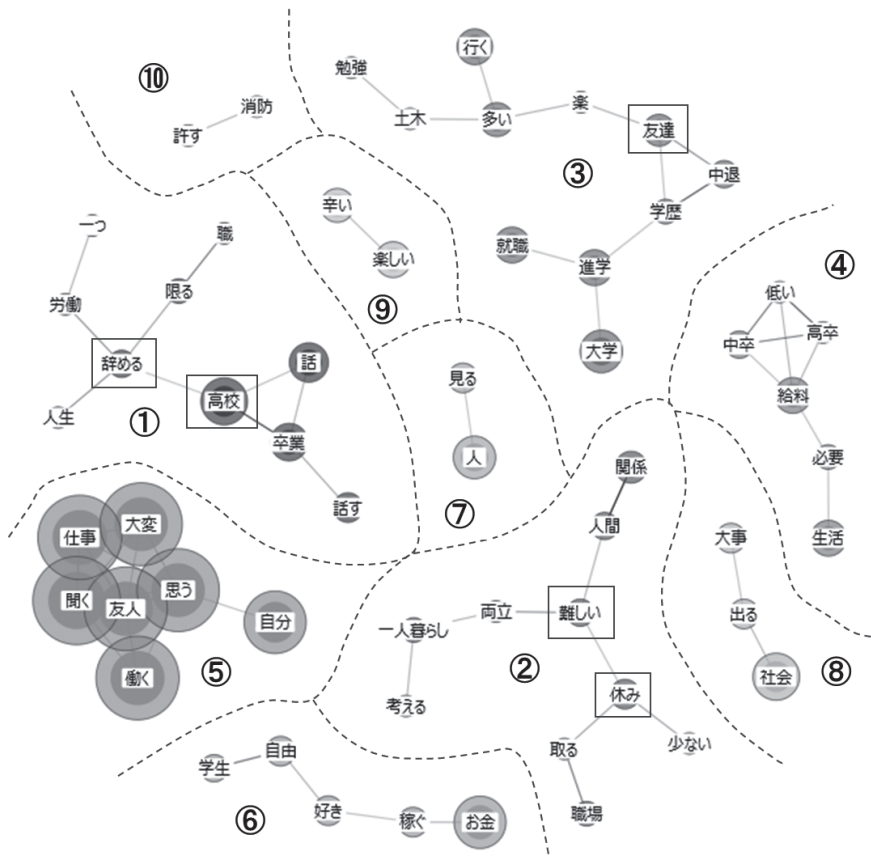


図3 [中群] 進学しなかった友人から学んだこと

ていた。

さらに、「高校」から、「人」「言う」「働く」に接続しており、人間関係の重要性も理解していた。

また、「高校」から、「持つ」「進む」に接続しており、「(友人は) 目的を持って進んでいた」として、他者から生きていく上での目的を持つことの重要性も学習していた。

総じて低群は、感情を素直に表現している傾向があり、物事を比較検討して判断せず、短絡的な判断が多く見られた。

4. 総合考察

本研究の目的は、大学1・2年生が「進学しなかった同世代の友人」から得た学びについて探索的に検討することである。

第一に、非計量多次元尺度構成法を用いた分析の結果、大学生は「働くことを通じて得た価値観や学び」と「働くことの現実と葛藤」の2つの認識を持っていることが明らかになった。第二に、高校時代のキャリア教育の習得度の違いが、進学しなかった友人の話に対する受け止め方に影響を及ぼしていることが確認された。これらの結果を踏まえ、本研究では以下の2点について考察を行う。

(1) 進学しなかった友人からの学びとは

大学生が友人との会話を通じて、「働くこと」や「生きること」に対してどのような意味付けを行い、自分自身の価値観を形成していくかが問われる。

本研究の結果、多くの大学生は、進学しなかった友人から「働くこと」に関する多様な学びを得ていることが示された。たとえば、仕事に対する責任感などが具体的な例として挙げられる。これは社会人講話を身近な人から聞いている状況と似ており、大学生が自らの人生や仕事のケーススタディを行っていると考えられる。松井(2024)は、社会人講話を聞くことで、講演者の経験を学生が自分事と受け止めて、自己と他者を比較しつつ、自己内省を深めるきっかけになることを述べている。キャリア教育を意識的に学習してきた学生(高群)は、友人の話を自らの知識に取り入れる傾向が強く、キャリア形成に活用する意識を持っていた。一方、学びの浅い学生(低群)は、出来事を感情的に受け止めるだけに留ま

る傾向が見られた。

学習した内容を、どのように認識して「働くことの礎」とするのか。「学び」を「生きる力」に変えていく本人の力量が必要となる。

(2) 高校時代のキャリア教育の意義

高校時代のキャリア教育の習得度によって、進学しなかった友人から得られる学びに違いがあることが分かった。高群の学生は、将来を見据えた視点を持ち、得られた学びを自身の意思決定の基準（たとえば、大学中退が将来のキャリアに悪影響を与えるといった認識）として捉えていた。一方、低群の学生は、自身の狭い視野に基づく思考に留まっていた。

高校では進路選択に関する教育が実施されているものの、すべての学生が十分な知識を習得できているわけではない点は課題として挙げられる。佐藤（2011）は、普通科高校において、将来の進路選択や決定理由が曖昧な学生が一定数存在することを指摘している。今後、高校教育では、高校卒業を単なるプロセスとするのではなく、キャリア自律を促す契機を提供することが重要であろう。

(3) 今後の課題

本研究は、大学1・2年生に対して「進学しなかった同世代の友人」から、「生きていくこと」や「働くこと」に関して何を学んだのかを明らかにした。今後の課題として、本人の「高校時代の学習に対する意識」や、所属していた「高校時代の学びの環境」が影響を与える可能性がある。たとえば、高校時代の考え方や進学率、友人の属性などが、学びにどのような影響を与えるかについても検討する必要がある。これらを踏まえたさらなる研究が求められる。

引用文献

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。

国立青少年教育振興機構（2023）「高校生の進路と職業意識に関する調査報告書——日本・米国・中国・韓国の比較——」令和5年6月

松井広美（2024）「大学における社会人講話によるキャリア教育の一事例——キャリ

ア・オリエンテーションを用いた内省の促進——」『キャリアデザイン研究』20, pp137-142.

労働政策研究・研修機構（2010）「学校時代のキャリア教育と若者の職業生活」『労働政策研究報告書』11 月, No125.

佐藤史人（2011）「高校普通科における職業教育・キャリア教育に関する現状と課題」『和歌山大学教育学部紀要. 教育科学』61, pp85-88.

ABSTRACT

Learning from Non-College-Bound Peers: Connections with High School Career Education

KUNII Akinori
TAZAWA Minoru

This study investigates what first- and second-year university students learn from their peers who did not pursue higher education regarding living and working. It examines the relationship between these learnings and high school career education. Conducted in September 2024 at a private university with six humanities faculties, the survey included 327 students enrolled in mandatory career planning courses. Participants provided open-ended responses about their learnings from non-collegiate peers and their experiences with high school career education, based on a 13-item framework from the Labor Policy Research and Training Institute (2010). Utilizing KH Coder for text analysis, the study employed a combined correlational and dictionary-based approach to identify key themes. Results reveal that students perceive two main aspects: values and insights gained through working and the realities and conflicts of employment. Furthermore, the level of engagement with high school career education significantly influences the depth and nature of learning from peers. Students with extensive career education (“high group”) demonstrated a more future-oriented and structured application of peer learning. In contrast, those with limited career education (“low group”) tended to respond more emotionally and less strategically. The findings highlight the critical role of high school career education in shaping how students interpret and utilize learnings from peers who did not continue to higher education, underscoring the need for enhanced career education programs in high schools.